

# 張愛玲『小團圓』楚娣の恋愛

——モデル張茂淵の伝記との比較を通して——

鈴木基子

## はじめに

『小團圓』は、張愛玲が米国で中国語を用いて書いた実質最後の長編小説で、逝去後に出版された。『小團圓』はヒロイン九莉が、混乱した時代に多くの男性と巡り合い、恋愛と結婚を通して成長する「自伝的小説」であった。その出版経緯とあらずじ、登場人物については、拙稿にて言及した<sup>1)</sup>。本論は九莉のおばの楚娣に焦点を当てて、検討する。身近な存在である親族の女性の中で楚娣が、特徴のあるタイプで、九莉に影響を与えていたことが想像されるからである<sup>2)</sup>。

『小團圓』が「自伝小説」或いは「自伝的小説」とささやかれたため、センセーションを巻き起こし、先行研究は数百篇に登るが、小説内容に散文や伝記を当てはめて論じている場合が多く見られる。そのため、小説の登場人物とそのモデル個人のイメージが混在する危険がある。小説は小説、伝記は伝記と全く別のもので扱うという当たり前のことが、この『小團圓』では、登場人物とモデルがあたかも一致しているかのような錯覚に捉われて、読者に興味本位に読まれがちである。本論は、小説と伝記を明確に分けて扱う。

先行研究として、劉鋒杰主编『小团圆的前世今生』の一章に「姑姑楚娣——柏拉图式的守护神」<sup>3)</sup>、王一心著『《小团圆》对照记：张爱玲人际谱系』の一章に「盛楚娣：张茂渊——“‘轻行智识分子’的典型”」<sup>4)</sup>がある。前者は、小説の筋を追いながら、最後に「楚娣は上の世代の経験で、九莉のために参考になることを提供し、彼女に恋愛の複雑さを理解させ、自己の幸福をつかめるようにしたいと思う」<sup>5)</sup> 役目があり、「強靱な自立した女性」「自己の英知で家族の歴史と将来を見守る」と説く。後者は、小説よりも伝記に重点を置き、現実の張茂淵と姪の張愛玲、甥の張子静や家族に言及し、張愛玲の書く物語には、

1) 「張愛玲『小團圓』における恋愛と結婚——ヒロイン九莉を中心に——」『研究紀要』日本大学経済学部、第76号、2014年10月20日。九莉は張愛玲（1920—1995年、75歳）がモデルと言われる。

2) 盛楚娣は、張愛玲のおば張茂淵（1901年6月13日—1991年6月、90歳）がモデルといわれる。楚娣の兄の盛乃徳は張愛玲の実父である張廷重（1896—1953年、57歳）がモデルである。楚娣と乃徳はきょうだいである。張廷重と張茂淵は父張佩綸（1848—1903年、56歳）の後妻であった李菊耦（1866—1912年、46歳）が生んだ子であり、他に先妻の子である異母兄がふたりいる。卞蕊秋は張愛玲の実母黃逸梵（1893—1957年、64歳）がモデルである。『小團圓』では「二嬢三姑」（蕊秋と楚娣）としばしば、まとめて語られる。

3) 劉鋒杰主编『小团圆的前世今生』安徽文艺出版社（合肥）2009年9月、p100—105。

4) 王一心『《小团圆》对照记：张爱玲人际谱系』文匯出版社（上海）2009年11月、p49—58。

5) 劉鋒杰主编前掲書『小团圆的前世今生』、p105。

ひとりも完璧な人がいない、それは家族、周囲の親戚と関係があり、彼女（張愛玲、筆者注、以下同様）の愛が破壊され、悲観的な人間性が悪い人生観を形成しているという<sup>6)</sup>。

論文では「前期小説では旧中国の女奴隷のイメージを塑造し、『小團圓』では新たに“出て行ったノラ”の女性イメージを提供した<sup>7)</sup>」と、前期小説と後期小説の女性イメージの変化を述べるものがある。また「女性自身に対する残酷に近い自省と自己分析を通して、男権文化が女性に与える“天使”と“妖婦”の二種の二項対立的な役割に対して解析を行い、女性の自覚と独立意識を喚起し、最終的に父権文化への対抗に到達することを目的とする<sup>8)</sup>」と説くものがある。つまり、女性像、女性学から旧社会の伝統である父権社会を分析するものである。個別の女性の生き方や楚娣ひとりのみ到的を絞った論文は、寡聞にして見当たらない。

伝記の一章に張茂淵の伝記が見られることがある。たとえば、閔紅は『死生契闊張愛玲——以及她愛過的那些人』の中で、張茂淵の愛情物語を振り返り、骨身にしみる真実をブラックコーヒーのような人生と形容する<sup>9)</sup>。賈月珍と鹿理梅は、『張愛玲情感世界的伤痕』の中で、親族に裏切られ、53年待った後に、月明かりを見た、気ままな人生と描写する<sup>10)</sup>。

本論は、まず楚娣の生き方を追い、そこからヒロイン九莉へ与えた影響を楚娣との共通点から見出し、それから、小説の楚娣と現実の張茂淵の生き方を比較し相違点を探り、それらの心理的背景と原因を探究することを目的とする。なお、台湾皇冠文化出版の『小團圓』を底本として使用した<sup>11)</sup>。

## I 盛楚娣・九莉のお婆の恋愛

### 1 緒哥哥

盛楚娣は、九莉の父乃徳の妹である。九莉の母蕊秋が15歳の時に、盛家に嫁いでき、小姑の立場であるが仲良しになった。同性愛とおじにからかわれたこともあるほど、楚娣は兄嫁蕊秋と仲が良かった。楚娣は兄嫁の蕊秋とふたりで外国に留学したこともあり、その時、楚娣は異国で料理を学んでいた。異国で蕊秋とともに中国人で外務省務めの簡煒が好きになり、三角関係になった。だが、簡煒に「私の永遠の妹」<sup>12)</sup>と見なされ、楚娣の思いは報われなかった。当時、蕊秋は乃徳と結婚していたので、離婚してからでないと、簡煒と再婚できなかったため、楚娣は蕊秋のために簡煒と偽装結婚することまで考えていた。残念ながら、簡煒は帰国後、女子大生と結婚してしまった。

6) 王一心前掲書『<小團圓>対照記：張愛玲人际譜系』、p58。

7) 朱昱熹「从“旧中国的女奴”到“出走的娜拉”」『安徽文学』2013年第10期、p28。

8) 黄晓东「西方女性主义视野中的张爱玲小说创作」『当代文坛·作家与作品』2010年3期、5月、p113。

9) 閔紅「姑姑張茂淵：做剩女，挺有意思的」『死生契闊張愛玲——以及她愛過的那些人』聯合文學出版、2011年1月、p85—103、p102。

10) 「第3章 清爽利落的姑姑+知己張茂淵」賈月珍・鹿理梅『張愛玲情感世界的伤痕』知識出版、2011年1月、p18—23。

11) 張愛玲典藏8張愛玲『小團圓』（台灣）皇冠文化出版、2009年3月初版6刷。以下、前書を張愛玲『小團圓』前掲書と記載する。

12) 張愛玲『小團圓』前掲書、P194。

帰国してからしばらくして、盛楚娣は外資系企業の職業婦人になった。大人になった楚娣が恋愛関係になる相手の緒哥哥<sup>13)</sup>は、竺家の表大爺<sup>14)</sup>が父で、生母は三姨奶奶の女中で、生母は出産後に売られていた。緒哥哥は老けて貧相なヤセギス風情で年齢不詳だが、人より遅い26、7歳位で大学を卒業した後に、銀行勤めをしていた。

《真善美》という雑誌の「魯男子」という小説は、中華民国の初めに、「いとこと恋愛」するのはタブーであり、それが発覚した場合は、宗法社会の掟により罰せられるという内容であった。雲鳳といとこの息子（原文「表姪」）が恋愛をし、「父方の同姓のいとこ」（原文「堂姪」）と知らず、肉体関係があった。これはタブーであり、男性は一族の長によって祠堂で鞭打たれ、女は輿に乗って外へ逃げて救われたという中華民国初期の物語である<sup>15)</sup>。宗法社会の影響はまだ健在であった。精神的な心のつながりだけでなく、肉体関係があったことも問題視されたようだ。

いとこ間の結婚がタブーである理由は、人倫を犯すこと、遺伝学的なものが考えられよう。「古典的命題ともいべき近親婚に関する議論は極めて活発であるにもかかわらず、法律上、近親婚を禁ずる理由の説明としては、近親婚の道徳的、社会倫理的事由と優生学的事由が漠然と挙げられるにとどまる」<sup>16)</sup>。

一般に、中国人の漢族の結婚で前提となるのは、「同姓不婚」「異姓不養」「同宗不婚」であり、「輩分」(generation)も考慮し、「異世代婚禁止」であった。

中国の宗族大家族制では、宗族ごとに規定があり、それが強い拘束力を持っていた。「女系の近親との結婚は忌避されるようになり、まず世代を異にする例えばおばの列に相当する者とおいの列に相当する者との結婚するいわゆる『外親尊卑為婚』が禁止され（唐律）、ついで自分と同輩親でも女系の直接のいとこ（姑舅兩姨姉妹）とは通婚が禁止されるに至った（明律）」<sup>17)</sup>。

中国の婚姻法を見てみる。「革命中国では、1931年の婚姻法以来、夫婦および子によって構成される家族を対象としているが、他面では、5代内（8親等内）の傍系血族間の婚姻を禁ずる昔からのタブーを認めているのは伝統的な慣習との妥協である」<sup>18)</sup>。そして、傍系血族とは、すべて自己と出生が同じ源の血族のことを指し、「旧中国社会では、父を通じての血統を重んじ、母方血族は外親として、一段軽いものと見たのであり、中華民国民法でも、親族会議会員の順序は父系を先にし、母系をあとにし、また、堂（従）兄弟姉妹（父の兄弟の子）間の相婚を禁じ、表兄弟姉妹（父の姉妹の子および母の兄弟姉妹の子）間の相婚を禁じなかったのも、かかる観念にもとづくものである」という<sup>19)</sup>。

1950年の「中華人民共和国婚姻法」では、結婚してはならない場合について第5条で「当事者が直

13) 緒哥哥は李開弟（1902—1999年、97歳）がモデルであるといわれる。

14) 表大爺は、李鴻章（1823—1901年、78歳）の孫である李国傑（1881—1939年、58歳）がモデルである。

15) 張愛玲『小團圓』前掲書、p156。

16) 有地亨『近親婚』『家族法体系Ⅱ（婚姻）』、有斐閣、1959年6月、p44。

17) 牧野巽『中国家族研究（上）』第一巻、御茶ノ水書房、1979年10月、p5。

18) 大塚勝美「中国婚姻家族法における親族」『法社会学』有斐閣、20号、1968年3月、p103。

19) 大塚勝美前掲論文「中国婚姻家族法における親族」、p109。

系血族関係にあるとき、同一の両親から生まれた子であるとき、または両親のいずれかが共通であるとき、但し傍系血族関係にある者（5親等以内）の間の結婚については慣習に従う<sup>20)</sup>とある。

つまり、宗族父系長制社会では、慣習法が根強くはびこり、それは宗族によって規定が異なるもので、1950年に婚姻法が示されても、すぐには規定を統一できぬものであったことが理解できよう。登場人物がモデルと同じ生年と仮定すると、楚娣の生年は1901年であり、九莉の生年は1920年であるので、旧社会の宗族の慣習法の影響を大きく受ける。さらには、「同じ輩分の代である『輩行』をシンクロナイズさせる努力をかなり行っている——（略）——同族ではないにも関わらず、嫁のやりとりで輩分を非常に意識する。——（略）——正式な中国の史書には、このような慣行は全く記されていない。しかし、実際のフィールドワークでは、通婚関係の中で常に輩行を一致させていこうとする傾向が、非常に強く見られる。」<sup>21)</sup>という。

「輩分を維持する面では、婚姻関係はある種の危険を冒すことになる。婚姻によって夫婦は同じ序列に考えられる。同族内で16代目の男子と18代目の女子が結婚すると、親族の輩分の序列に混乱が生じてくる。輩分の序列を混乱させないためにも、輩分を共有している範囲の中での婚姻を避ける意識は非常に強く働く。それは不道徳という観念ではない。安定的に秩序づけた序列が乱され、村の秩序を壊し、日常レベルでの呼びかけの言葉までもが混乱することを回避するという性格が強い。そこで密接な婚姻関係が行われている場合にも輩分を一致させる努力がされるようになる。」<sup>22)</sup>

「輩分（generation）」を考慮した「異世代婚禁止」である。それを取り入れた原因は「漢族の場合、同族として認めることと、上下関係を認めることがセットになる。共通の序列体系を持たなければ、様々な混乱が生じてくる。そのためのナンバーリングであり、有効な手法として『輩分』が成立してきたのだろう」と言われる<sup>23)</sup>。

楚娣にとって緒哥哥とは、母の兄弟の孫の関係、または外祖父の曾孫<sup>ひまご</sup>の関係であり、世代が異なり、しかも女性の楚娣は男性緒哥哥よりも年上であった。そのため、ふたりの関係は女性が誘惑したと周囲に思われていた。

楚娣はいとこ（表大爺）の息子と恋愛していた。緒哥哥は楚娣の母（李菊耦がモデル、小説中の「奶奶」、九莉の祖母）のきょうだい（李経述がモデル）の息子である表大爺（李国傑がモデル）の息子である。楚娣は外祖父（李鴻章がモデル）の曾孫である緒哥哥と恋愛と肉体関係があった。それは、8親等内の婚姻禁忌にあたるのだが、女系傍系親族なので、婚姻は可能であるが、輩分が異なる婚姻禁忌の習慣に抵触し、女性が年上であることも周囲の理解を得にくい関係であった。「同姓不婚」の原則のあ

20) 田中克己「中国の婚習一法と慣習」『日本常民文化紀要』7 成城大学, 1981年3月, p158—159.

21) 上田信; 阿部健一「中国社会史の立場から—漢族社会における婚姻関係」重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて Kyoto University Research Information Repository No.17, p16—28, 1996年4月, p19.

22) 上田信; 阿部健一前掲報告書「中国社会史の立場から—漢族社会における婚姻関係」重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ, p21.

23) 上田信; 阿部健一前掲報告書「中国社会史の立場から—漢族社会における婚姻関係」p27.

る中国で、異姓なので、結婚は可能であったが、幼馴染みであったことも、習慣に抵触する。中国では、タイのように幼馴染み同士で結婚する現象は見られないと言う<sup>24)</sup>。

要するに、楚娣と緒哥哥の関係は、宗族の慣習法と法律の禁忌に、微妙に触れるものと触れないものがある。法的に婚姻が可能であったとしても、大家族内の血縁の近さでは、いどこ同然で幼馴染みで世代が違う関係であっては、当時は宗族慣習法が優先されていた時代であるから、彼らの恋愛と結婚が禁忌とされたのであろう。「姑侄恋」は「不倫の恋」とも言われる<sup>25)</sup>。

台湾では、1974年の『最新六法全書』で結婚できない親族について、どのような傍系家族と輩分なのかまでも、きちんと規定している<sup>26)</sup>。

楚娣と、表大爺の息子との恋愛は禁忌として、すでに蕊秋から警告を受けていたが、お互い離れられず、感情を抑えきれず深い関係を継続させていた悲劇のカップルである。九莉は「緒哥哥は楚娣と永遠にある種の基本的理解を共有している」という。しかし、しばらく経って、「彼女（九莉）がたまに別のこのために彼（緒哥哥）を連想すると、いつも思うのだ。理解し合っているからどうだというのだ。理解し合っているけどどうにもなるというものでもないわ<sup>27)</sup>」という。また、九莉は緒哥哥の苦しい流浪の楚々とした哀れさ、情けなさを味わうことができず、母性に欠けている。

楚娣は緒哥哥を愛しており、緒哥哥よりも楚娣の方の思いが強く、肉体関係があったが、楚娣は最後まで緒哥哥にプロポーズされなかった。

「私（楚娣）はずっと人が求婚する時、どう言うのか知りたいと思っていたの」。ある時、緒哥哥が「どうして君（楚娣）は結婚しなかったの？」と聞いたので、その時ベットの上で、私ははっきり聞こえなかったので、彼が「君（楚娣）はどうして僕と結婚しようとししないの？」と言ったと聞き間違えて「あなた（緒哥哥）が言わなかったからよ」と私は答えたの。やり取りの幾つかの対話はすべて英語で行われ、軽快であたかもハリウッドの喜劇の洒落言葉のようだが、次の言葉は明らかにアンチクライマックスであったと自覚した。彼（緒哥哥）は「いや、僕はどうして君が結婚しなかったの？と尋ねたんだよ」と言ったの。九莉はどうしていいかわからず言葉を失ってしまった。だが、楚娣は表面上さほど気にしていないようであり、緒哥哥もじっとこらえていた<sup>28)</sup>。

「あなたが（結婚しよう）言わなかったからよ」と楚娣が答えた後、楚娣は緒哥哥が「じゃあ、結婚しようか」といってくれるのを期待していたが、それが裏切られ、水をぶっかけられたようなアンチクライマックスになってしまった。実のところ楚娣は緒哥哥との結婚願望があったのだ。長年に渡った緒哥哥と楚娣との関係が周囲に白眼視され、一時途絶えたこともあった。途中で、緒哥哥は維嫂嫂との

24) 上田信：阿部健一前掲報告書「中国社会史の立場から—漢族社会における婚姻関係」、p21.

25) 王一心『《小團圓》対照記：張愛玲人际譜系』、P58。／劉鋒杰編前掲書「小團圓的前世今生」、p101.

26) 「第983条2. 旁系血族および傍系姻族の輩分（generation）の同じくないもの。ただし傍系血族の八親等外、旁系姻族の5親等外の者はこの限りでない。3. 旁系血族の輩分が同じで8親等以内の者。ただし、従兄弟姉妹はこの限りでない」。田中克己前掲論文「中国の婚習——法と慣習」、P153.

27) 張愛玲『小團圓』前掲書、p221.

28) 張愛玲『小團圓』前掲書、p168—P169.

浮気を経験した。九莉は緒哥哥の浮気に「人は見かけによらぬもの」と反感を持ち、おば楚娣にすまないと同情していた。緒哥哥は維嫂嫂との浮気で、きっと楚娣から抜け出したかったのかもしれない。楚娣は言う。「彼（緒哥哥）が別れの時に、私は彼とちゃんと話してはっきりさせたの。やはり気持ちが通じ合った友人なんだということに——。はっきりさせないと心がいつまでも耐えられないの」<sup>29)</sup>。維嫂嫂にとっては、遊び人の夫に報復するため、慎重で口が堅くて頼りになる緒哥哥を選んで安全を考えた末の不倫であった。

緒哥哥は結局、最後は親戚の三小姐と結婚してしまったのであった。これも運命であった<sup>30)</sup>。緒哥哥からのプロポーズをひたすら待ち続けた楚娣は、報われぬ思いを胸に抱いて過ごした。

家父長制は、宗族ごとに規定があり、それが強い拘束力を持っていた。女性楚娣の視線からは、宗法社会の掟がタブーとなり、結婚できなかつた悲劇であると考えられよう。封建的伝統思想に押しつぶされ、叶わぬ純愛に長年心が奪われて独身であった女性楚娣である。それに対して、緒哥哥は年下インテリで優柔不断で、タブーに逆らうことはせず、夫のある婦人維嫂嫂とちらりと浮気をし、無難な結婚をするのであった。女性の一途さ、健気さに比べて、男性側の軽薄さが際立つ描写と言えよう。

だが実は、肝心の緒哥哥の心理描写があまりないので、緒哥哥が楚娣ではなく別の親戚の女性と結婚した本当の理由がはっきりしない。女性側の視線の理由しか判明していない。

結局、緒哥哥には緒哥哥の考えがあつたためなのかもしれない。そもそも、当時の中国社会では恋愛と結婚は別物であつて、一夫一婦多妾制であつたので、たとえ近代の大学教育を受けた男性であっても、恋愛結婚は勇気のいることで、男尊女卑の社会でもあつた。「首を横に振って（がっかりさせられ）溜息をつかせるのは、その男性は彼女のひとりの平凡な「いとこ」（原文「表姪」）であつた。楚娣とその「いとこ」（緒哥哥）との間にもし、真の愛があるなら、もしその「いとこ」（緒哥哥）が蕊秋が言った通り、ただ『彼女を利用』し、彼女の財産目当てでなかつたとしても、彼らの愛は、始まった時からすでに結果のない愛であつた」という見方もある<sup>31)</sup>。要するに、緒哥哥は楚娣を結婚対象として認識していず、楚娣にとっては悲しい結果となつてしまつたのであろう。ここでも、九莉の時と同様に、男女の思いはすれ違うことを見せつけられる。

楚娣は緒哥哥を心の底から愛していたし、深い関係があつたが、結婚したいという彼女の思いは遂げられなかつた。楚娣は、一旦相手を好きになつてしまつたら、宗族の掟の禁忌も周囲の忠告も耳に入らない男女の愛、特に女性から愛する人への抑えられない強い思いが明白であつたが、緒哥哥には別の思いがあり、楚娣の恋愛は報われない切なさに満ち溢れていた。

29) 張愛玲『小團圓』前掲書, p161.

30) 張愛玲『小團圓』前掲書, p161.

31) 劉艷：「姑姑張茂淵的金鎖記」蘋果日報／副刊／蘋果樹下 <http://hk.apple.nextmedia.com/supplement/apple/art/20111218/15903158>

## 2 夏赫特と焦利

楚娣は緒哥哥と一時関係が途切れた時に、ドイツ語を学びに行き知ったドイツ語学校の妻子持ちの校長でナチス党の夏赫特（ドイツ人）と情交を通じた時期があった。九莉は夏赫特の家にも会ったことがある。楚娣は夏赫特に歯科医を紹介してもらい、歯の矯正をした。九莉は楚娣のマンションに同居していたので、彼が来ると、いつも親友の比比の家へ行って食事をしていた。おばに理解を示し、気を使っていたのであろう。九莉は両親が離婚して、父の再婚後、実家を飛び出し、母とお婆の暮らしていたマンションに身を寄せる。その後、母は外国に行ってしまう、九莉はお婆とふたり暮らしになる。

第二次世界大戦のドイツの敗戦で、楚娣は彼が帰国するのを、借金までして親身になって手伝った。これらのことは、外の人は知らなくて、楚娣は周囲には「典型的なオールドミス」と思われていた。楚娣曰く、「自分にこれらのことがある人は人を疑い、これらのことがない人は人を疑わない。そうじゃないかしら？」、九莉は、「わからないわ。もしかしたらそうかも——」と思い、人を疑わない性格だった<sup>32)</sup>。九莉は楚娣より若く、人生経験が浅い分、世間知らずで純粋さが際立つ。

楚娣は職場の事務室で残業中に、同僚のハーフの焦利とふざけていて強姦された苦い思いもしている<sup>33)</sup>。ハーフの人は、外資系企業では、地位は楚娣と同じで頭打ちであった。

楚娣は自立能力があり、英語が堪能で、敗戦国の外人男性上司夏赫特を助けるべく、援助を行う人情と健気さが感じられるが、異性愛に恵まれなかった。はじめから妻子持ちの不倫であるとわかっている、相手を好きになると止められないのが、楚娣の愛であった。

## II 楚娣の恋愛を支える時代と思想

### 1 楚娣の名家盛家の没落

楚娣の幼少から青春期の時代の宗族家父長制とそれを支える儒教思想が『小團圓』ではどう描かれているのか。楚娣と九莉の名家を例にたどってみる。

『小團圓』の九莉の父方の「盛家」は遼れば、北方の貧しい読書人であったが、小説の舞台の1930年代当時は名門であった。楚娣の祖父は竺家で李鴻章（1823—1901, 78歳）がモデルであった。

兄の盛乃徳（九莉の父）は、古典を暗記する日常を送っている。家柄が良くて「遺少」の読書人であるが、麻葉アヘン・モルヒネを吸い、女郎屋へ行き時間をつぶしている。乃徳は、本家に新年のあいさつをしに行ったり、「年事」の準備をしたり、株式取引所に行って金を買ったりしていた。盛家の分家の成員である乃徳は「遺少」として、働かずに生活していける資産を持ち、下男鄧升を地方に家賃・地代の徴収に行かせていた。

大家族の内部の人間関係は一筋縄ではいかなかった。盛乃徳は父の後妻の生んだ子で、分家であっ

32) 張愛玲『小團圓』前掲書, p223.

33) 張愛玲『小團圓』前掲書, P159—160.

た<sup>34)</sup>。楚娣は分家の時は首飾りと「金葉子」をもらった。本家と分家の間には、遺産相続の再分配の裁判があり、本家と3名の兄弟が争い、それは難航していた。中国は『長子相続』ではなく、『均分相続』であり、しかも女性の相続の権利が認められていた。「均分相続」では、長男が家を継ぐ権利をもっているのではなくて、複数の男子に家産が分配されていた。その相続は父の死後に限らず、数世代後に行っても良かったため、兄弟間の争いが絶えなかった<sup>35)</sup>。楚娣の母（九莉の祖母「奶奶」）の持参金があったのである。楚娣の母が亡くなった後、父の先妻の息子（大爺）は、後妻の子どもでもある乃徳と楚娣の孤児の財産を横領していた。本家と分家はそれぞれ、裁判官に賄賂を贈ったが、分家である乃徳の出した金額が少なかった。女性楚娣も相続権があったが<sup>36)</sup>、乃徳が謀反行為をし、彼が陰で示談に応じたことによって裁判に負けてしまった。妹楚娣はそれから兄乃徳との関係を断つのである。

兄乃徳は妻蕊秋との離婚後、娘の九莉の学費や生活費など、本来は元夫の乃徳が負担すべきであった。ふたりが離婚する時に、西洋人の弁護士により、離婚協議書が作成され、子どもの教育と外国留学ができる予定であったが、乃徳により反故にされた。九莉は父乃徳に留学費用を支払ってもらえなかったばかりでなく、あげくの果てには暴力を受けて監禁され病気になった。九莉はやっとのことで家を抜け出し、母と一緒に生活することになり、母の生活負担は重くなってしまった。九莉は度々、「母にお金を返さねば」との思いに駆られていた。実際、父乃徳は留学費用を出せなかったのではなくて、出したくなかったのである。他に、蕊秋と楚娣の外国行きが、本家との諍い<sup>いさか</sup>になったり、以前の九莉が大爺の養子になる話がとっくに立ち消えになったりした<sup>37)</sup>。乃徳は教育を軽視し、後妻翠華との生活や、愛人愛老三との博打や薬物使用の乱れた生活を送り、家を没落させてしまった。精神まで病んで、終には自宅を追われて、姪<sup>めい</sup>に間借りして世話になるまで落ちぶれた<sup>38)</sup>。

緒哥哥は父が暗殺された後、銀行務めを辞め、北方へ仕事探しに行き、天津で働き、戦後は上海へ戻り、台湾へも行ったが大陸に戻り、上海経由で北方へ行く。職探しのために戦争の時代に迷走する。楚娣の甥で、九莉の弟の九林は、日本が負けて、職を失った。

前近代から、近代へ変わる戦乱の時代とはいえ、名家の一族の分家の家長たる兄乃徳と、跡継ぎの甥九林が、自墮落で、時代に追いつけず、名家が衰退し落ちぶれていく様子が描かれている。

一般に「儒教社会を成り立たせる単位は家および拡大された父系親族集団である宗族であったが、宗族においては父から息子へとその血縁上の系譜関係（宗統）を存続させていくことが至上命題であり、あらゆる家族の機能はこれに従属させられた。それを儒教では親に対する『孝』という徳目で表わして

34) 現実のモデルで当てはめると、盛乃徳（張廷重 1896—1953年、57歳）は爺爺といわれる清朝の名臣張佩綸（1848—1903年、55歳）の後妻（奶奶＝李菊耦 1866—1912年、46歳）が産んだ子である。張廷重が7歳の時に父が、16歳の時に母が亡くなっていた。王一心『「小團圓」対照記』文匯出版社、2009年11月、p31。

35) 滋賀秀三『中国家族法の原理』1967年3月第1刷、2009年2月第6刷、創文社、P57、p82—83、P175。／張愛玲『小團圓』前掲書、p106—107、p112—113、115、p121。

36) 白水紀子『中国女性の20世紀—近代家父長制研究』明石書店、2001年4月。／「1930年、国民党政府により公布された新民法によって、妻の相続権の保護が明文化され、娘にも相続権が認められた」、p20—21。

37) 張愛玲『小團圓』前掲書、P95。

38) 張愛玲『小團圓』前掲書、p311。

いる」<sup>39)</sup>といわれる。

「家の中で父親の権威は絶対的であり、彼は家長として妻や子供・孫たちを垂直・一元的に支配した。そして祭祀や婚姻、財産の管理・継承など、家族の再生産にまつわるあらゆる規則は、かならず父系の血縁原理に基づいて処理され、承認されたのである。こうした社会にあっては、女性はずねに劣位に置かれた。女性が生まれても、いずれ嫁いで他家の成員になるので、最初から『子』には数えられず、いわゆる『三従』（父、夫、息子への三段階の服従）の教えによって、家父長への一方的な服従が求められた。」<sup>40)</sup> 宗族家父長制は父権が絶大で、男尊女卑であった。

楚娉は名家に生まれたが、名家ゆえの強い父系親族の宗族に強く支配されていた。幼少時に両親を亡くし、父親代わりであった義理の兄大爺と裁判で争って負け、実の兄乃徳はふがいなく頼りにならず、甥九林も同様で、親族間の人間関係と生活の苦悩を実感し、実家の没落を経験したのであった。これらの名家の没落の原因は、時代のせいばかりでなく、家族の能力にもよるところが大きく、楚娉の体験は、宗族家父長制を暗に否定しているものと考えられよう。さらに、幼くして、両親を亡くした娘である楚娉には、家父長制を支える儒教思想である、「孝」や「三従」を実践する対象の父母がいなかったため、大家族の中で肩身の狭い思いをしたと思われる。

## 2 楚娉の儒教思想からの逸脱

五四運動以後、儒教社会が批判にさらされるようになってきた。ここでは、楚娉の生き方と儒教思想との関わりを、貞操と跡継ぎと恋愛の観点から見てみる。

まず、「貞操」について、女性には婚前も婚後もそれが求められる時代であった。蕊秋は自分の派手な異性関係とは正反対に、娘の九莉が肉体関係ができることに反対していた。彼女は肉体関係ができることに一目置く発言をしている。「関係が発生しなければある日再会した時に、それは味わいがあって素晴らしいと言える。関係があるともう完全にだめよ」と<sup>41)</sup>。楚娉は緒哥哥と婚前交渉をし、禁忌の愛にのめり込んでいた。

儒教が重視する跡継ぎについては、「もしかしたら、あなた（九莉）は私と同じように、子どもを生めないかもしれないわ。二嬢（蕊秋）はどのくらい墮胎したかわからない」と楚娉は言う。中国では、楚娉と九莉は性関係があっても、妊娠しなかった。蕊秋は夫でない男性との間の子九林を産んでも、離婚後は倫理的に私生児は産めないし、闇に葬るしかなかったのであろう。結婚前に妊娠することも好ましくなかった。これらは結果として、表面上は一見儒教倫理を肯定しているようだが、うがった見方をしてみれば、儒教倫理に縛られた中国人の生命が再生産されていくことの拒絶ともとれよう。

「儒教の伝統によれば、結婚は双方の宗族の問題であり、男女個人の問題ではないとされている。

<sup>39)</sup> 高橋保「五四新文化運動期の中国における婚姻制度と女性の地位」(〈特集〉女性とその時代)『国際文化研究所紀要』2、城西大学、1996年8月、p27.

<sup>40)</sup> 同上.

<sup>41)</sup> 張愛玲『小團圓』前掲書、p83.

—— (略) ——つまり、『血』の継承こそ結婚の本義であり、男女の愛を語るどころか、『男女は授受するに親しく』してはならないとされてきたのである<sup>42)</sup>。

「中国の結婚制度において、男女本人の個性的・情愛的な要素は極端に無視せられ、とくに女性はその点で抑圧された立場におかれていた<sup>43)</sup>」というのである。

そもそも男女が自由に恋愛することばかりでなく、婚前に性関係をもつことも、男尊女卑の儒教思想とかみ合わない。

楚娣は愛を感じてから相手と性関係を結ぶ。「婚前の純潔、婚後の貞操」が、特に女性に厳しく求められた中国では、楚娣と九莉の婚前交渉と恋愛結婚志向と跡継ぎを産めない可能性は、儒教思想を暗に否定するものとするのが妥当であろう。

楚娣は「愛さえあれば」とタブーを気にせず「待つ身の愛」を経験していたのである。独身で婚前に性関係を持ったり、不倫をしているのは、貞操を重視した中国前近代の旧社会の良家の子女に求められる儒教倫理の価値観からはみ出し行為であると言えよう。

蕊秋や楚娣と、九莉の言動から、伝統的恋愛・結婚観の否定、儒教思想からの逸脱、宗族家父長制の否定を行ったと分析できよう<sup>44)</sup>。

### 3 楚娣の恋愛と精神的自立

楚娣は、自立しており「叶わぬ恋」に身をやつし、独身であった。独身になる理由は、「女性の自立仮説」「相対所得仮説」「つり合い婚仮説」の3つがある。女性の経済的な自立によって男性の結婚難や女性の未婚化が生じるという「女性の自立仮説」、潜在的稼働力と期待生活水準の不均衡によって晩婚化が生じるという「相対所得仮説」、自分の条件とつり合う結婚相手を探すことによって未婚化や晩婚化が生じるという「つり合い婚仮説」といった3つの理論がある。近年は、「つり合い婚仮説」が支持されているらしい<sup>45)</sup>。しかし、楚娣が緒哥哥と結婚できなかったのは、女性から見れば宗族の掟の禁忌が理由であろうが、根本的には結婚に対する男女の思いの不一致であった。楚娣は緒哥哥を深く愛していて、彼と結婚したかったが、緒哥哥は楚娣を結婚対象として見ていなかったということであろう。夏赫特はすでに妻子持ちという壁があったが、恋にのめり込むだけで、彼の時は結婚を考へてはいなかったようである。楚娣にとっては「愛は盲目」で、無意識に障害の多い恋愛、報われぬ愛を経験してしまうのだった。楚娣が経験した恋愛は、報われぬ愛、結婚できない愛であった。

九莉も楚娣も、蕊秋も、3名ともあまり世間に公にできない恋愛を経験している。張愛玲は多くの作品に「張愛玲の“愛情”物語は、皆それぞれの秘め事の“戦争”であり、心理エネルギーが激烈な交戦である。彼女の主人公はほとんど孤軍奮闘する<sup>46)</sup>」傾向が見られるという。

42) 潘允康著・園田茂人監訳『変貌する中国の家族——血統社会の人間関係』岩波書店、1994年11月、p53。

43) 滋賀秀三『中国家族法の原理』前掲書、p482。

44) 九莉の詳細については、前掲拙稿「張愛玲『小團圓』における恋愛と結婚——ヒロイン九莉を中心に——」を参照。

45) 野々山久也編『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社、2009年3月、p244。

46) 张柠「张爱玲和现代中国的隐秘心思」『陕西师范大学学报（哲学社会科学版）』第41卷第5期、2012年9月、p24。

張愛玲は、1944年5月に「自己的文章」にて「私は人が恋愛している時、戦争或いは革命の時よりも素朴で飾り気がなく、もっと勝手気ままであると考えている。戦争と革命は、事件自身の性質によって、往々にして才知（に対する）要求の方が、感情の支持に対する要求よりももっと切実である」<sup>47)</sup>という。恋愛は才知よりも、感情の発露が優先されるということであろう。

だが、楚娣も九莉も、愛した男性と同棲はしなかった。「同棲する女性はね、彼女たちの地位は男性よりももっと低かった」。もともと女性の地位が低かった時代に同棲して更に自らの地位を貶めないプライドがある<sup>48)</sup>。「愛人」になって囲われることはせず、ふたりとも、蕊秋も男性が女性の部屋へ来る交際方法である。一夫多妻多妾制の社会で、妾になって囲われることに、妻妾同居生活に抵抗感があるのである。

張愛玲は『海上花列伝』が大好きで、米国でその書物の上海語を英語と国語（標準語）に訳す作業をしていたことがある。1983年に、「恋愛の定義のひとつは、ひとりの異性と、他の異性との区別を誇張することだと思う。本の中でこれらの妓楼の遊び客の節を守り浮気をしない傾向は、以前の男子がより惰性的で、より“習慣に支配される動物”であり、刺激を求めて相手を変えることをしなかったのではなく、より切実で基本的な要求、性と同様に必要なもの——愛情があったのだ。——（略）——ずっと民国初期までそのようであった」<sup>49)</sup>と述べる。旧社会では、恋愛は家庭外であるものであって、妓楼で妓女と妻子持ちの恋愛が多く行われていた。妓女と男性の間には愛情があったので、男性は多くの妓女と付き合おうとはせず、浮気をしない傾向があったということである。

楚娣も九莉も「愛さえあれば」「愛こそすべて」と恋愛に打算がなく、女性側は心で感じて深い関係に突っ走るが、男性側の思いとすれ違い、正式に結婚までいかない点が共通していた。

要するに、中国の名家が没落していく中で、西洋的教育を受けた教養あるキャリアウーマンの楚娣が母のような旧式結婚ではなく、新式「恋愛結婚」を求めて、愛し合う相手がいたが、破局を迎えてしまった。だが楚娣は、ひたすら愛情を重視し、安易にお見合い結婚をしようとは考えず、精神的に自立し、仕事を持ち独身であった。

#### 4 楚娣の経済的自立

妹の楚娣は、英国の料理学校に留学経験があり、英語でコミュニケーションがとれ、外資系企業で働き、ドイツの放送局でニュースのアナウンサーも務め、高収入を得ていた。戦争の爆撃でホテルに避難してから、兄嫁の蕊秋といっしょに赤十字で働いたこともある。

家では、兄乃徳とともに、電話で金や株の取引をしたり、一時、表大爺を救うために、兄嫁蕊秋のお

---

CNKI

47) 「自己的文章」初出 1944年5月『新東方』第9巻第4期、第5期合刊。／張愛玲「自己的文章」張愛玲典藏全集8『散文卷一 1939—47年作品』皇冠文化出版、2001年4月、p91.

48) 「自己的文章」前掲書 張愛玲典藏全集8『散文卷一 1939—47年作品』、p93.

49) 「國語本『海上花』譯後記」初出 1983年10月1日台北『聯合報 副刊』。／張愛玲『張看』經濟日報出版社、2002年10月、p405.

金を預かって投機をして失敗したこともあった。表大爺は緒哥哥の実父であり、要職に就いていたが、罠に掛けられ、最期には重慶方面の人に暗殺された。楚娣は愛する人の父を助けたい気持ちでいっぱいだった。家屋敷（衙堂）を3つ売って蕊秋に返金したのであった。

蕊秋は外国に行く時に、アパートをふたりのドイツ人に貸し出していた。蕊秋の元夫の妹楚娣のアパートに、娘九莉が、食費を折半して同居していた。楚娣は蕊秋とアパートを共有し、ドイツ人に貸しているように見受けられる。晩年に楚娣は蕊秋にアパートの権利金を半分返したので、蕊秋は外国へ行き、おそらくもう戻ってこないようだったので、アパートは楚娣の所有になったと推定される。小説の中に、当時としては新しい法律の女性の財産継承を取り入れているのである<sup>50)</sup>。楚娣のモデルである張茂淵は女性であるが、母は男の子の服を着せて育てたと小説に書く。「三お嬢様（楚娣）は小さい時、男装させられ、兄（乃徳）は女装させられた。」<sup>51)</sup>「私は今思い出してみるに、女性に男装させるのは、ぼんやりした女権主義のようで、娘が力強く、将来結婚を自分で決められるように願っていたのではないかと思う」<sup>52)</sup>と後年の『對照記』で張愛玲がおばの母（奶奶）を回顧する。

楚娣は英語ができ、安定した仕事を持ち、有能で、経済管理を行い、安定した生活を送り、ひとりで自立しているのである。旧社会でこのように、外国留学をし、英語が話せ、自立した仕事を持ち、経済力に恵まれた女性は、上流階級と言えども珍しい存在であろう。名家に生まれても、自立できない女性が多かったので、楚娣は生活が自立した「近代女性の理想像」のひとつと考えられよう。

伝統ある名家を没落させた兄乃徳と甥九林に対しては、乃徳の妹である楚娣から同情や扶養の精神は発揮されず、別々に生計を営んでいる。これは、女性がひとりで食べていくことだけでも難しいことと、もし自活出来ていても、大家族制の伝統があったとしても、楚娣には、「孝」や「三従」を尽くす両親がいなかったこと、家を没落させた兄乃徳や甥九林を養いたくない気持ちが表れているのではなかろうか。性格が合わなくて、生きる姿勢も異なる親族とは、きょうだいや親戚といえども、縁を切る潔さと個人主義が見られる。兄や甥を相手にせず、自分だけの身を守り、生活していくというのである。ただし、こうならざるを得なかった背景は、推察するに、幼くして両親を亡くして、親族間で苦勞し過ぎた楚娣は、戦乱の絶えない時代にもあって、「人を信用できない」性格が形成されていたからではないかと考える。そのため、誰にも頼らず、自立できる仕事と経済力を維持し、孤高を堅持していたとも考えられよう。上流階級の無理のない自然な自立形式であったが、その心理の根底には親族の男性たちと不安定な世の中への根強い不信感があるのではないかと推察される。

蕊秋よりも安定した仕事を持つ楚娣の方が、生活力があつたのは言うまでもない。だが、この時代、このふたりの女性のように、女性が多少なりとも経済力を持つことは珍しく、九莉を排除した盛家の急

50) 「1926年1月、広東で国民党第2回全国代表大会が開かれ、結婚・離婚の自由、女性の財産継承権などを規定した婚姻法をつくることが議決された。」高橋保が引く、中華全国婦女連合会編著中国女性史研究会編訳『中国女性運動史1919—49』論創社、1995年p85—87。高橋保前掲論文「五四新文化運動期の中国における婚姻制度と女性の地位」、p47。

51) 張愛玲『小團圓』前掲書、p120。

52) 張愛玲典藏全集9「對照記」『散文卷二 1952年以後作品』皇冠文化出版、2001年4月、p46。

激な没落ぶりと合わせて、旧社会の男性中心主義の否定、宗族家父長制へのあてつけとみることができよう。また、宗族である家を軽視し、家のため、一族のためという考えを否定し、あくまで個人のための生活を追求する姿、西洋の個人主義の反映とも考えられよう。

「家族の近代化を家族形態としてとらえた場合、核家族化と同義とされることもある」<sup>53)</sup>といわれる。九莉や楚娣の育った家庭は宗族家父制で維持されていた前近代的な家族であった。旧社会の名家が没落していく中で、楚娣と九莉の女性たちは、内なる敵である親族と戦いながら、外なる敵の男性中心主義と、旧社会の宗族家父長制と戦いながら、時代の変化に臨機応変に適応し、西洋近代の個人主義の考えをもって、女権主義を内に秘めながら、しっかりと地に足を付けて生きる道を模索していたのではなかろうか。彼女たちの生き方は、結果的に儒教倫理に違反し逸脱したのであって、初めから強い抵抗感を抱いて否定していたわけでない。両親を早く亡くし、親族男性が能力がなく、名家の実家が没落する過程において、核家族化せざるを得ず、いわば、楚娣本人の意志よりも、楚娣が周囲の環境に流されて追い込まれていった末の精神的経済的自立であったことも判明した。

## 5 『小團圓』の女性たち

兄である乃徳は、息子の九林を学校に行かせず、旧式の家庭教師を付けた方法で教育していた。学校教育を受けさせることは、別れた妻蕊秋との離婚協議書に記載されたことなので、五爸爸がとりなして九林は学校教育を受けることができるようになり、大学へも通ったが途中でやめてしまった。

蕊秋は学校教育の重要性を説く「学校マニア・教育ママ（原文「學校迷」）」<sup>54)</sup>であるが、それを受け入れる息子九林は、あまりやる気がなく脱落してしまう。緒哥哥は大卒だが、敗戦によって仕事を失い、台湾まで足を運び、就職活動に苦勞する姿が見られる。甚だしきに至っては米国留学のエリート法学博士廖仲義が英国の湖水地方で不妊症の妻を殺す話がある。米国教育を受けたエリート男性でさえ、跡継ぎが欲しいという儒教思想の価値観から抜け出せない例である。

一方相対する女性たちは、留学を経験した楚娣と蕊秋、外国の料理学校に通い外資系企業で働く楚娣、香港のヴィクトリア大学に通い、小説を書く九莉と、英語が堪能で外国人とコミュニケーションができる楚娣、蕊秋、九莉。中でも楚娣は、経済的に自立ができている。九莉と付き合った邵之雍と燕山がふたりとも、九莉と結婚する際には楚娣もいっしょに同居したいと望むほど、楚娣は家事が上手で、日常生活の能力も高いようだ。

九莉の通ったヴィクトリア大学は、キリスト教で、シスターがいた。シスターたちは、香港陥落時に医療関係に従事している。キリスト教は、太平天国運動のもとになったものであり、すべての人は平等であるとの思想に基づいている。太平天国運動は、女性の纏足を禁止し、上下・男女の差別のない大同ユートピア思想に基づくものであった<sup>55)</sup>。九莉は信者ではないが、張愛玲が人間の平等、男女の平等の

53) 望月嵩『家族社会学入門—結婚と家族』培風館、1996年5月初版、2008年4月初版第8刷、p166。

54) 張愛玲『小團圓』前掲書、p19。

55) 高橋保前掲論文「五四新文化運動期の中国における婚姻制度と女性の地位」、p29。

影響を受けていたのであろう。母の実家である「卞家」の使用人は、太平天国運動の発生地である南京出身であった。

『小團圓』では、女子教育が始まり、社会が変化していく時代において、女性は中国国内の学校ではなく、香港を含めて外国の教育、西洋文化を受容しているのである。前近代の私塾や家庭教師といった伝統的中国の男子の教育と好対照で進歩的な印象を受ける。

女性に多種多様な生き方の例があり、たとえ妾や恋敵にも、女中たちにも、女子の教育と自立の重要性は確実に暗示されている。邵之雍の「妻」の章緋雯は歌姫だったが離婚した時にもらう扶養費でトラックを買って商売をしたいと考え、郁先生の父の元妾で今は邵之雍の愛人の辛巧玉は頭が良く養蚕技師で学校経営をしており、邵之雍の愛人の小康小姐は看護師で彼は教育を受けさせておいており、碧桃は結婚後子供ができず、姑にいじめられ、夫は外地へ行き女性と暮らしていたが、プロ意識の高い女中になり、大爺の女中兼妾の来喜は、南京に嫁に出されて帽子店を経営し、大爺の男の子を産む。女性たちは逆境にめげず、たくましいのである。

「私（九莉）はノラという名前が好きである」<sup>56)</sup> というが、「なぜだか、この名前にくどくとうんざりしている」<sup>57)</sup>。ノラは、イプセンの『人形の家』の主人公であり、夫と子供から離れて、自立する新しい女性である。九莉と蕊秋の会話ではっきりする。母の蕊秋がいうには、「結婚してもやはり自立できる能力が必要で、用意しておいて（結果的に）使わないほうがよい」<sup>58)</sup> 備えておくに越したことはないというのは、前近代の名家の女性の標準的な考え方であろう。

九莉は、母に小説家の難しさを忠告されるが、物書き、画家は当時、女性が自立する手段のひとつでもあったようだ<sup>59)</sup>。当時の女性の職業は、女中、教師、女優、商店経営、医師、看護師など限られたものであり、小説家になることも、自立のひとつの手段であったのだ。九莉は母にお金を返したい一心で、「二両金子」を働いて貯金して作った。

上記のことから『小團圓』に描かれる女性の登場人物は、いかなる出身であろうとも、働くこと、教育を受けること、自立することが、示唆され、暗示されているように見受けられる。

そして、女性がプライバシーを主張し、他人のプライバシーに関心がなく、精神的に自立している。これは、蕊秋と楚娣、九莉に顕著に見られ、対照的なのは、蕊秋の夫乃徳であった。彼女たちは最も好奇心を嫌がり<sup>60)</sup> 二叔（乃徳）が他人の手紙を開封することについて、「自分の生活が貧しい人がプライバシーを探る」と妻蕊秋に夫乃徳が非難されている。中国はプライバシーのない世界と言われて久しい。欧米のように、私生活に干渉しないプライバシーの重要性を求めるのは「近代的」個人主義であろう。楚娣、九莉、蕊秋たちは西洋的価値観の持ち主であるといえよう。

56) 張愛玲『小團圓』前掲書、p35.

57) 張愛玲『小團圓』前掲書、p35.

58) 張愛玲『小團圓』前掲書、p137.

59) 村田雄二郎編、胡曉真「文苑・多羅・華蔓」『『婦女雜誌』からみる近代中国女性』研文出版、2005年2月、p118—119.

60) 張愛玲『小團圓』前掲書、p78.

ただし、九莉は祖母「奶奶」が親子ほど年の離れた夫、自分より年上の息子のいる男性と結婚させられたことについて、「婿は才子で妻は美人」「10 数年一緒に暮らしたにすぎない」「エデンの園の生活をした」「ロマンス」、「彼女（九莉）は彼らを愛している。彼らは彼女に干渉しない」「ただ静かに彼女の血液の中に流れている、彼女が死ぬ時、もう一度死ぬ」<sup>61)</sup> などと言い、自分の体に流れる名門の血と祖母「奶奶」の旧式結婚に、誇りと憧れを持っているようだ。だが実は、娘の楚娣は、母が父に嫁がされて、不平不満があったであろう、家族集合写真の彼女は老けて見えるし、きっと嫁ぎたくなかったであろうと、思いを馳せ、母が性格が風変わりになり、人に会わなくなった、早死にしたとも言う。『清夜録』を見て、詩文集の母の詩は偽で、詩文集の詩歌も父が作ったものと断言する<sup>62)</sup>。

楚娣は幼少時に、両親が亡くなっているのもあまり記憶がないのであろう。モデルによれば父は2歳の時、母は11歳の時に亡くなっている。楚娣は両親や名家のことを話すことは話すが、あまり快く思っていないことが感じられる。むしろ、母のあまり幸せそうでなかった結婚に同情を寄せるようである。

現実を重んじ、同じ女性として母の旧式結婚を不憫に思う楚娣と、自分の名家の祖母に憧れを抱く九莉との違いがある。九莉は自分は個人的に家父長制と旧式結婚を否定していても、名家と祖父母のロマンスは中国伝統の誇りとして重んじるプライドがあったのであろう。楚娣は母の恋愛ではなかった旧式結婚にかなりの疑問を感じているようであり、昔の話をするのも嫌がっていた。何よりも、楚娣の生き方は、母の生き方と対照的ですからある。九莉は、中国の「翁婿」（舅と娘婿）のロマンス、年の離れた夫婦に共感があり、それは、かなり年上の邵之雍と汝狄にみるように九莉自身の男性の好みでもあったからであろう。中国では結婚した娘の夫（娘婿）は、娘の父である舅にとって自分の息子同然で、関係がとても良いのである。

1915年に五四文化革命を推進した『新青年』の創刊者である陳独秀らは、「儒教の忠孝倫理、家族制度を社会進化に逆行する礼教社会の遺物として断罪したのである。この新文化運動においては、同時に、封建的な旧礼教・旧道徳が女性に与えている精神的・肉体的抑圧を批判し、女性の覚醒を促すことをその主要目標の一つとしていた。この運動の初期、『新青年』は女性問題に関する討論において、まず集中的に「三綱五常」「三従四徳」の封建倫理の女性に対する抑圧—具体的には請負婚に由来する苦悩、再婚に対する偏見、男尊女卑の考え方など—を批判し、女性の人格の独立回復を提唱した。」<sup>63)</sup>

五四運動後、女性解放運動も重要視されるようになり、①高等教育での男女平等、②女性の経済的進出、③女性労働者の解放、④伝統的婚姻制度の打破、⑤女性参政権の獲得、⑥フランス勤工儉学運動への女性の参加、などの諸問題が展開されていった時代であった<sup>64)</sup>。

五四運動は1919年に起こり、九莉のモデルである張愛玲が生まれたのは1920年、正に時代が旧社会（前近代）から近代へ移行しようとする時であった。張愛玲の『小團圓』に、前述した①から⑥までを

61) 張愛玲『小團圓』前掲書、p121—122.

62) 同上、P121.

63) 高橋保前掲論文「五四新文化運動期の中国における婚姻制度と女性の地位」、p34—35.

64) 高橋保前掲論文「五四新文化運動期の中国における婚姻制度と女性の地位」、p37.

当てはめてみると、登場人物に該当する者がいるのは、①②③④であり、⑤⑥のような政治への参加、運動といったものは皆無である。中でも④の「自由な男女交際」は際立っている。

1944年5月に「自己的文章」では「私は私の作品は力が欠けているとわかっている。しかし、小説である以上、できるだけ小説の人物の力を表現することができるだけだ。彼らに替って力を出し創造することはできない。しかも、私は彼らは軟弱な凡人にすぎず、英雄のような力はないが、正に、これらの平凡な人は英雄よりも、この時代の全体を代表することができるということが出来る」<sup>65)</sup>と述べる。

平凡な人を書くこと、時代を代表することに焦点を当てていることがわかる。これは、1976年に書いた『小團圓』にも言えることではなかろうか。

「私が書く題材はこのような時代であり、私は“交錯した”(秩序がなく雑然としている、原文「参差」)な手法を用いて人類がすべての時代の中で生活し続ける記憶を描写することが比較的ふさわしいと思っている。私がこの手法を用いて描写するのは、人類のすべての時代の生活の記憶である。」「また私は“交錯した”書き方を用いているので、善と悪を取り入れることと、魂と肉のきっぱりとした衝突の古典的手法が好きではないので、私の作品は明確なテーマに欠ける」<sup>66)</sup>という。

善でもなく、悪でもなく、女性の心の感情を重視している小説であり、人間である以上、矛盾する点もあり、善悪で分けられない複雑なありのままの人の心を描いているのが特徴である。

『小團圓』に登場する男性と女性を比較してみると、男性側は、身近な親族男性は教育と仕事への情熱の欠如が明白で優柔不断で、買春を好み賭け事をし、アヘンを吸い、妾や愛人を持ち、旧式結婚をし、名家を維持できず没落させ、私生活に干渉する、旧社会の人間関係を保持する大家族主義、男性中心の特徴が目立つが、邵之雍や燕山、荀樺のように能力があり、世渡り上手もいる。男性の成功者にはどうも皮肉が込められているイメージがある。女性側は、教育も仕事も自然に行う熱意があり、私生活を守り、恋愛に一途で「愛さえあれば」、近代思想の個人主義、核家族の特徴が強いようである。

身近な親族男性が「前近代」の中で没落し退廃していくのに対し、女性は、西洋的「近代的」進歩的ではあるが、改革や抵抗を声高に叫ばず、政治参加をして世を先導するリーダーにならず、静かに耐える抑圧された姿が顕著である。中国旧社会は、儒教思想の影響で、男尊女卑と言われるが、『小團圓』の女性は男尊女卑でもなく、女尊男卑でもなく、近代的教育と近代思想を持っている女性たちが前近代と近代の狭間で愛に苦悩して生きる姿が描かれている。描写される男性と女性のイメージは実に対照的で、男性中心主義へのあてつけとも考えられよう。

<sup>65)</sup> 「自己的文章」初出『新東方』第9巻第4期、第5期合刊、1944年5月。／張愛玲典藏全集8『散文卷一 1939—47年作品』、p90。

<sup>66)</sup> 同上、p91, 92。

### Ⅲ 現実のおば張茂淵の伝記と『小團圓』の楚娣との比較

#### 1 おばの伝記―「耐え忍ぶ愛」から78歳の結婚へ

文献とインターネット資料を参照に、楚娣のモデルであった張茂淵の伝記を追ってみる<sup>67)</sup>。張茂淵は1901年生まれで2歳の時、つまり1903年に実父張佩綸55歳を亡くしているが、その時実母李菊耦は35歳であった。李菊耦は23歳の時43歳の夫に嫁いでいた<sup>68)</sup>。張茂淵が2歳の時に父が、11歳の時に母が亡くなっている。張茂淵は、兄嫁で張愛玲の母の黄素瓊と一緒に英国へ留学する。渡航する船の中で張茂淵は上海交通大学を出て、公費で留学する李開第に出会う。1924年、25歳のことだった。だが、李開第には、中国の良家の習慣に漏れず、許嫁がすでにいた。ふたりは「一目ぼれ」のようであったが、李開第に許嫁がいて、なおかつ張茂淵が売国奴と言われる李鴻章の家系であることから、ふたりの間に明るい未来ははじめから存在していなかった。張茂淵は、英国王立音楽院（ロイヤル・アカデミー）でピアノを学んだ。ふたりは相次いで1927年末に帰国し、友人の紹介によって、張茂淵は李開第と正式に知り合う。

彼女は英国で李開第に拒絶された時に、「もし、この世で生きているうちにあなたを待つことができなければ、来世であなたを待ちます」<sup>69)</sup>と言った。李開第は1932年に許嫁の夏毓智と結婚し、張茂淵は結婚式の花嫁の介添え人を務める。その後、彼は会社から香港勤務を命ぜられ、18歳の張愛玲が香港大学に留学した1939年には、彼女の後見人を引き受けた。1941年の香港陥落で、重慶に行き、1945年に抗日戦争が終わると、上海へ戻っていた。張茂淵は、李開第の妻夏毓智とともに家族ぐるみで付き合いを続けており、彼女はずっと独身であった。

張茂淵の仕事は、帰国後は外資系企業（英商怡和洋行）で働いた。その後、ラジオ放送局でアナウンサーをしていた。中国女性はじめてのメインアナウンサーであり、外国映画の現場通訳や同時通訳もし、正にキャリアウーマンの先駆けであった。仕事に恵まれ、ゆとりのある経済力のため、投資や株の売買をした時もあり、生活は豊かで安定していたが、ずっと心の中で、李開第を思い続けていたようであった。

1965年に、李開第の妻夏毓智が病気になり、最期の数か月は、夫と張茂淵が看病をした。妻は臨終の時に張茂淵の手を取って長年心の中に秘めていたことを話す。「私はあなたが李開第と心が通じ合ったカップルだとわかっています。はじめ、私はちっとも事情がわかりませんでした。あなたがずっと恋

67) ①作者：羅志淵 民間歴史「一生一世只為等一個人（張愛玲姑姑的故事）」香港中文大學中國研究服務中心主辦 <http://mjsh.usc.cuhk.edu.hk/Book.aspx?cid=4&tid=2387>.

②「李開第的愛情傳奇」2012年4月7日 <http://www.mhlib.sh.cn/blog/xiangxi.asp?fid=21071> 上海市閔行區圖書館。

③「李開第的愛情傳奇」（2012年4月4日）春申潮 博客 [http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_69eda1bd01012nlg.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_69eda1bd01012nlg.html)

68) インターネット資料の年齢と書籍の年齢が一致しないことがある。ここではインターネット原文を根拠に優先させた。

69) 「李開第的愛情傳奇」2012年4月7日 <http://www.mhlib.sh.cn/blog/xiangxi.asp?fid=21071>.

情を心の奥に隠しているのを、ちっとも気づきませんでした。私が死んだら、ふたりで夫婦になることを願っています。そのことで私の願っていたことが叶います（宿願です）」ということだった。

文化大革命が始まり、李開第は反革命と認定され、彼女の娘は広州へ行き、息子は自殺をした。李開第の文革中の罪名は、「外国人の経済侵略を幫助した罪」で、資本家出身であったことも影響した<sup>70)</sup>。清朝貴族出身の張茂淵は文革中に、家財を差し押え没収されトイレ掃除に従事したが、立場はまだましであった。

文革が終了し、1979年に李開第は名誉回復され、78歳の張茂淵と結婚したのであった。張愛玲は米国で手紙でこのことを知り、感動で熱い涙を流したという。ふたりは張茂淵が1991年6月に90歳で乳癌でなくなるまで、12年間、幸福な生活を共に送ることができた。

このように、現実の伝記もまた、小説同様にドラマチックであり、伝記には楚娣のモデル張茂淵のハッピーエンドのロマンスがあった。

## 2 小説『小團圓』の楚娣とモデル張茂淵の伝記との共通点

まず、小説『小團圓』の楚娣とモデル張茂淵の伝記との共通点を挙げる。

1. 母がかなり年上であった父に嫁がされたこと、2. 両親を幼少時に亡くした家庭環境、3. 留学をしたこと、4. 好きになった男性と知り合った時にふたりの間には明るい未来がなかったこと、5. キャリアウーマンとして働いたこと、6. アナウンサーをしていたこと、7. 英語を生かした職に就いていたこと、8. 株の売買をし、投資で失敗したこと、9. 愛した男性が別な人と結婚してしまったこと、10. 家事能力が高かったこと、などが挙げられる。

次に処世態度と性格についてみる。楚娣が才媛で、洞察力のある人間であることが、九莉に恋愛や結婚ばかりでなく世の中のことを解釈する場面の数々で見取れる。例えば、コップ半分の水をみて、Russell（羅素）の言葉を引用し、「『悲観する者はコップの中の半分の水を半分空だと思い、楽観する者は半分満ちていると思う』私は今、半分満ちている生活を享受しているの」。九莉は楚娣がこのようにいうのが好きではなかった。九莉の心の中の蕊秋と楚娣は、九莉が小さい時はじめてそばに立って彼らが着替えてダンスをしに出かけようとしているところ——であった<sup>71)</sup>。楚娣はしっかり現実を認識できる性格であることがわかるが、九莉はそれに納得がいかなかった。九莉の頭の中には、幼少時の恵まれた時の優雅な思い出が強く、そのイメージを変えたくないであろう。

楚娣はほとんど親戚付き合いをせず、数人の性格の合う人を大切にしていた<sup>72)</sup>。一方、張茂淵については、「姑姑語録」という張愛玲が書いた張茂淵の語録がある。その中で「私のおばの話はある種の静かで平和な機知と見識がある」という<sup>73)</sup>。現実の張茂淵も小説同様、人間関係が広くはなかったようで

70) 鄭遠濤「姑姑：張愛玲在上海最後的牽掛」博訊新聞 2008年11月24日轉載 <http://www.peacehall.com/news/gb/misc/2008/11/200811240122.shtml>。

71) 張愛玲『小團圓』前掲書、p41。

72) 張愛玲『小團圓』前掲書、p223。

73) 「姑姑語録」張愛玲全集 8 張愛玲『張看』皇冠文化出版、典藏版 17 刷初版日期 2005 年 5 月，原始出版 1976 年，

ある。「生命は短すぎるから、そんな時間をそのような人と一緒に過ごすのは残念すぎる——」<sup>74)</sup>と述べている。

彼女にとって働くことは、決して特別な事ではなく、自然なことであった。キャリアウーマンであったが、肩肘を張って生きるのではなく、自然体であった。

閻紅によれば、張茂淵は「三高」高学歴で高収入で敷居が高いばかりでなく、意気込みが高い（向上心が高い）「四高」であるそうだ<sup>75)</sup>。これも、ひとつの見方であり、小説と伝記の共通点といえるであろう。

「職業婦人について、彼女は多くの意見がある、彼女は一般人が職業婦人のある種特別なタイプと分けることについて、その必要がないと感じている。職業上の成功と失敗は、ひとりの処世態度に係るのであり、家庭生活とは何の違もないと思っている」<sup>76)</sup>と張愛玲は張茂淵の職業婦人観を述べている。

張茂淵の家事能力については「姑姑語録」には「彼女は自分で言った『私は文武両道です。文は手紙を書くことができるし、武は靴底を縫うことができるから』」<sup>77)</sup>「このように彼女はいつも恨み言を言っている。『あなた（張愛玲）と一緒に暮らしていると、非常にくどくど（ぶつぶつ言いたくなる）文句が言いたくなる』しかも、尊大になる（相手が能力が低すぎるので）」<sup>78)</sup>。「彼女（張茂淵）は私たち張家の人に多少たりとも好感を持っていない——私（愛玲）に対しては割と良い方である——（略）——」<sup>79)</sup>と述べられている。これらは楚娣と張茂淵について、小説と現実が一致する表現であろう。

楚娣と張茂淵の恋愛を巡って、小説と伝記の共通点は、女性が男性を思う愛の方が強く、特に女性が一途に相手の男性を思い続けていたことであろう。裏返せば、好きになった男性は、女性の熱い思いを知りながら受け入れず、他の女性と結婚してしまったのだ。

張愛玲の性格については、米国暮らしの晩年 10 数年を支えて遺言も預かっていた林式同は、張愛玲の性格を「非常に敏感——」「面倒が嫌い——人から離れて暮らす」「一人で楽しむ——外部の制約を受けない」「達観する——一体以外のものは言うに足らない」「美を愛する——処世態度」と述べる<sup>80)</sup>。このように、毅然と自分の美意識と生活環境を保持し、他人に迎合せず、流されずに生きる張愛玲の性格が、おば張茂淵の性格とも似ているところが多いことがわかる。張愛玲はおばと幼少期から強いつながりがあり、無意識に影響を受けていたのかもしれない。

---

p136.

74) 「姑姑語録」前掲書 張愛玲全集 8 『張看』, p136.

75) 閻紅前掲書『死生契闊張愛玲——以及她愛過得那些人』, p87—88.

76) 「姑姑語録」前掲書 張愛玲全集 8 『張看』, p137.

77) 「姑姑語録」前掲書 張愛玲全集 8 『張看』, p138.

78) 同上.

79) 同上.

80) 林式同「有緣得識張愛玲」『華麗與蒼涼——張愛玲紀念文集』皇冠文化出版, 1996年3月初版, 1997年8月三刷, p77—84.

### 3 小説『小團圓』の楚娣とモデル張茂淵の伝記との相違点

小説と伝記の相違点は、たくさんある。以下、楚娣と張茂淵を「女性」とし、緒哥哥と李開第を「男性」と表記して、羅列してみることにする。まず、1. 出会いについては、小説は大家族の幼馴染みの親戚であり、伝記は英国に留学する船の中であること、2. ふたりのつながりは、小説が親戚で女性が世代が違う年上で、宗族の親族間の禁忌が存在するが、伝記は他人同士で、男性が女性よりわずか1歳年下で、相手に許嫁がいたこと、3. 小説では、女性が留学生で料理を学んでいたが、伝記ではロイヤルアカデミーでピアノを学んでいたこと、4. 小説では、女性は愛する相手男性と肉体関係があり、辛い愛を経験するが、伝記では、プラトニックであった可能性が高くて、未婚者の女性が既婚者の男性を思い続けていたこと、5. 現実の香港大学での後見人については、小説では触れられていなかった、6. 小説の女性は独身の半生で全生涯が描かれていないが、伝記は55年間思い続けた男性と、彼の妻の死後に結婚し12年の結婚生活をおくったこと、7. 小説では、男性が煮え切らないいい加減な男性で実父の暗殺後、銀行を辞め、敗戦後仕事を失い各地を転々とするが、伝記では男性は、資本家出身で上海交通大学卒の高学歴、エンジニアで英国外資系企業から香港に派遣されて働く有能な人物だが文革で迫害を受けること、8. 小説では女性には複数の交際相手が出現しているが、伝記では、ひとりの男性のみであること、などである。

性格では、小説内の楚娣は仕事探しに拘った描写は出てこないが、現実の張茂淵はこだわりがあったようである。放送局の仕事は、中国で初めての女性アナウンサーであった。「彼女は仕事を探すのに、好き嫌いが激しい。もし、男性ならば必ず家族を養って生活しなければならない。時に選択の余地がなく、どんなに苦しくても、働かねばならず、(働くことは) 言ってみれば彼の責任であり(働くということだけで)、名目がたつ。私のような家族のない女は、気に入らないことをしながら、<sup>うれ</sup>憂いに沈んだ顔つきでお金をかせいで心痛のまま生きていくのは何のためですか?」<sup>81)</sup> という。

このように、楚娣と張茂淵の共通点と相違点を比較してみると、両親の旧式結婚と家庭環境と、人間の性格と人間性が小説と伝記で多く一致しているようであるが、その他のことについては不一致の方が多く、特に好きになった男性の素性や経歴はモデルとはいえないのではないかと思えるほど異なっている。一応、李開第というモデルの男性が存在するけれども「自伝的」というよりは、小説として虚構の部分がかかなりあることが判明した。

もっとも、張愛玲が米国ロサンゼルスで『小團圓』を完成させたのは1976年であるから、その頃、中国は文化大革命が終了したばかりで、張茂淵と李開第ふたりの3年後の結婚は知る由もなかった。当時、張愛玲はおばと文通すらしていなかった。

張愛玲はおばの結婚について、1982年12月23日に莊信正に宛てた書簡で述べる。「おばが旧友の李開第と結婚しました。夫の李開第はエンジニアで、この2年80歳なのに顧問をして、最近任務を受けたそうです。どんな仕事かは言っていません」<sup>82)</sup> 事実を淡々と述べるのみで、いささか素っ気なさを感じ

81) 「姑姑語録」前掲書 張愛玲全集8『張看』, p137.

82) 1982年12月23日書簡、莊信正『張愛玲來信箋註』INK印刷出版、2008年3月、p123.

じさせられる。だが、伝記では「熱い涙を流した」と描写される。現実には弟張子静がおばを誤解した手紙「『おばはXという姓の悪い奴と同居している』（弟がおばと）同じ上海にいても、おばが李という姓のエンジニアと結婚したことを知らなかったはずはない」と張愛玲は1994年10月に莊信正に伝えている<sup>83)</sup>。1989年1月に、張愛玲は弟張子静に書いた手紙で、「おばは李開第と結婚した」と米国から知らせていた<sup>84)</sup>。

1979年から張愛玲は張茂淵と文通を始め、中国国内版の著作の著作権を李開第に委託して、原稿料をふたりに渡していた。同時に何度もアメリカからふたりに送金もしていたのである<sup>85)</sup>。だが、実の弟にはそういったことはしていなかった。弟への手紙で、あなたを助ける力がなくて本当に恥ずかしく思うと述べていた<sup>86)</sup>。おば張茂淵が、甥である張愛玲の弟の張子静と同じ上海で暮らしながらも、彼らは往来せず疎遠であったようだ。弟はずっと未婚で小学校教師、中学校教師をし、1986年に退職していた。

張茂淵の兄で張愛玲の父張廷重は、解放前に財産を浪費しつくしたが、後妻と江蘇路の14平方メートルの家に互いに寄り添って暮らした。だが、父は青島にも不動産を所有していたため、解放後人民政府が買い取り、毎年一定の利息を得ていたため、現実はそのなにもじめな生活は送っていなかったのである<sup>87)</sup>。

父張廷重は1953年に57歳で亡くなり、父の後妻の孫用蕃は1986年に亡くなる。

1937年から1953年までの香港大学への留学期間を除いた10数年間、張愛玲は、張茂淵と同居生活を送っていたので、気持ちを通じ合い、感謝の気持ちが強かったのであろう。張愛玲の弟張子静については、彼が姉について文を書くことに反対しており、弟との関係と感情はあまり良いものではなかったように推察できよう。

楚娣とそのモデル張茂淵について、小説はいくつかの事実以外は、多くが虚構として刺激的に脚色したものであった。小説は伝記とかなり異なる部分があると言える。

緒哥哥についても同様で、もしかしたら兄乃徳、甥九林などの親族男性を故意に、現実以上に低くどうしようもない存在の人間として描写していた感が否めない。なぜそのように描写したのは、もしかしたら、親族男性への復讐心があるのかもしれない。登場人物の性格や人間像というものは、どうしても、書き手の主観から逃れることは不可能である。九莉は楚娣のことを、同志のように見ていたかもしれないが、楚娣が実際に、姪をどう見ていたかははっきりしていない。当然、楚娣の九莉への思いはまた別のものではあらずだ。盛九林や盛乃徳についてももしかりである。九莉の目に映った楚娣であり、九林であり、乃徳である。特に、小説は楚娣の半生の一部分の描写に限られ、全生涯が描かれているわけで

83) 1994年10月5日、莊信正『張愛玲來信箋註』、p206注。

84) 子通・亦清「致張子静信」『張愛玲文集 不遺』天地圖書有限公司（香港）、2003年、p364。

85) 「張愛玲一遺札、十四年後送達」、2009年2月24日。ESWN Culture Blog. [http://www.zonaeuropa.com/culture/c20090224\\_2.htm](http://www.zonaeuropa.com/culture/c20090224_2.htm)

86) 子通・亦清 前掲書「致張子静信」『張愛玲文集 不遺』、p364。

87) 清秋子『張愛玲の私人生活史—愛恨傾城小團圓—』『小團圓』出版后第一部張愛玲全傳 京華出版社 2009年4月、p371。

はない。また、書き手である張愛玲の主観が伴うことと、当時の思いと、数十年経たのちの感情は、同じとは限らず、むしろ異なることがある点を配慮すべきであろう。

### おわりに

楚娣も九莉も名家に育ったが、名家の没落が時代の趨勢ばかりでなく、自堕落な男性が原因で起きたことを経験する身であった。中国伝統の教育を受けて、阿片モルヒネ買春賭け事に染まり、家産を無くし、家を没落させたふがいない兄の乃徳と甥の九林。妹の楚娣は留学経験があり、教養豊かで英語ができ、知的レベルがあり近代的な西洋的価値観をもち、西洋教育を受けて精神的にも経済的にも自立している。楚娣は恋愛については思うようにはならず、「愛さえあれば」「愛こそすべて」と愛を信じていたこの息子の緒哥哥と関係を持って、「輩分」(generation)の違いや幼馴染みの親戚であることが宗族規定の禁忌に触れ、なおかつ両者の思いはすれ違って、結婚にたどりつけない。自由恋愛をする楚娣は、宗族の掟のタブーや既婚者外国人の壁に抵触する障害があったとしても、愛を感じてしまえば、一直線に進んで相手を求める「純愛」志向である。特に、ふらふらと煮え切らない緒哥哥を相手に、健気に生きる楚娣、相手を好きになってしまえば、「愛は盲目」で周囲の忠告も非難も耳に入らず、その愛は報われなかった。楚娣も九莉も、「前近代」の宗族家父長制とそれを支える儒教思想や男性中心主義の枠には収まりきらず、はみ出さざるをえなかったといえよう。

中国の旧社会の価値観からはみだし、もがき苦しむ西洋的価値観を持った中国女性の中国男性社会への皮肉・あてこすり、家父長制の否定、儒教思想からの逸脱である。男尊女卑でも女尊男卑でもなく、前近代社会で近代の教育と思想を持った楚娣が、時代の狭間で恋愛に苦悩する姿が描かれていた。

図らずも自立した女性の楚娣であるが、その原因は、若くして両親を亡くし、親族間で苦勞したこと、きょうだいの兄でさえ信じられない関係の中で暮らしてきたことが大きく影響しているのではなからうか。時代も混沌としていたが、親族、家族が信頼できず、裏切り合う環境と戦乱の世界においては、自然と自己防衛力が働き、強くなるであろう。楚娣も九莉も、張茂淵も張愛玲も同様に「人間不信」が濃厚な気配が推察される。西洋の個人主義的傾向が随所に見られ、精神的にも経済的にも自立していたが、女権主義はいまいで、政治参加は求めず、社会改革を目指す人物でもなかった。

では、なぜ、張愛玲がこのような作品を書いたのであろうか。男女の仲は、どんなことも起こりうるし、人間がどんなに法律や倫理でしばってみたところで、愛し合う自然な心まで、制限することはできないであろう。張愛玲は、宗族の掟のタブーであれ、不倫純愛であれ、人間が人間を愛する心の自然さ、男女間の愛情に規制をはめられないこと、男女の愛に世の中の倫理はどうでもよいことを読者に伝えたかったのではなからうか。小説は小説で、モデルについて知らなくても、キャリアウーマンの報われぬ愛の切なさが切実に伝わってくる。当時の儒教の影響を強く受けた良家の女性像とは異なった、新しい近代的な女性像のひとつを提示したかったのではなからうか。さらに、事実以上に低く見積もって書かれた親族男性たちは、もしかしたら、張愛玲の復讐心の表れといえるかもしれない。現実の伝記ではモデ

ルである張茂淵が李開第と1979年に78歳で結婚したところに救いがあるようだが、『小團圓』が脱稿した1976年時に、彼らはまだ結婚していなかった。

小説は虚構と「報われぬ禁断の愛」の悲哀に満ち溢れ、伝記は苦難の末に78歳で結ばれるハッピーエンドであり、小説『小團圓』と伝記は共通点よりも異なる点が多々あった。『小團圓』の楚娣に関する内容とあらすじは、両親の旧式結婚と家庭環境とキャリアウーマンであることと彼女の性格と人間性以外は相異点が多く、特に愛した男性についてはモデル李開第とは程遠く、『小團圓』の小説は楚娣に限っては、あまり自伝的とは言い難いものであることが判明した。

作者である張愛玲の主観と判断が強く働き、おばが姪をどう見ていたかは、また別の思いがあるであろう。楚娣はヒロインではなく、楚娣の生涯の一部分が描かれているに過ぎない。

楚娣のモデル張茂淵について調べ、楚娣と比較した結果、漠然と小説『小團圓』を読むのに比べて、楚娣の人間像への理解と関心が深まり、想像と憶測を膨らませることができよう。

一生涯の書かれた伝記の实在人物張茂淵の方が、部分的半生の小説の人物楚娣よりも遙かに活躍しておりユニークで、インパクトがあった。

男女の愛は、自然発生的で運命的なものであり、心の愛を法律倫理や掟で縛ることが不可能であること。近代的な自立したキャリアウーマンが自分が納得する愛を求めて生きることの尊さと素晴らしさ、切なさや哀しさが表裏をなしていること、幸福の裏には何らかの犠牲が伴っているが、それでも真の愛を求めて生きずにはいられないこと、愛とは生涯を駆けて追い続ける価値のあるものであることを、楚娣と張茂淵の愛の諸相から、学ぶことができるのではなからうか。

[本論は2013年度特別研究員の成果の一部です.]